抑圧する者とされる者

和田洋一

一　階級闘争と民族問題

敗戦の日から一年と一ヵ月たって、日本人はようやく『共産党宣言』を本屋で買い求めることができるようになった。非合法出版物としての『共産党宣言』は、戦前にも存在していたのであって、わたしの旧制高校の後輩であり、マルクス学にかんしてはわたしの先輩である松田道雄氏は『私の読んだ本』（岩波新書）の中で、『宣言』の英語版を京都府立一中の四年生のときに入手し、読んで感銘をうけたとのべている。

特別のルートがあれば戦中でも『宣言』を入手できたのであろうが、わたしは是が非でもという熱意はなかったので、敗戦後ナウカ社から合法的に刊行された早川二郎訳の『共産党宣言』を本屋で買い求めて読んだ。わたしは左翼の理論家ではなく、左翼のシンパサイザーに過ぎなかったが、ともかくインテリの一人だったので、『宣言』に書かれていることは大体読む前から知っていた。そして「一切の従来社会の歴史は階級闘争の歴史である。」というあの有名な規定にかんしては、ばく然とした疑問を感じていた。「一切の歴史が階級闘争の歴史である」というのは言い過ぎではないか、民族と民族、国と国、宗派と宗派、男と女、いろいろな闘争、解放闘争があるのに、全部階級闘争

だと言ってしまうのは乱暴だと、わたしは思いつづけてきたのである。

現在、八五歳に達しているわたしは、マルクスやエンゲルスが、階級闘争にばかり力を入れて、民族闘争、民族独立闘争を軽視したことはまちがいであったのではないか、マルクスはドイツ人であるとともにユダヤ民族の一員であったし、エンゲルスがドイツ人でありながら、ブリテン島に住んでいるアングロサクソン系の労働者といっしょになって、アイルランド系の労働者を差別し、軽蔑していたことに、わたしはすくなからず不満を感じていたのである。

『共産党宣言』の第一章には「抑圧する者とされる者」との対立が指摘され、この対立はマルクス、エンゲルスによって二つの階級として把握されているが、マルクス、エンゲルスにとって、抑圧する民族とされている民族との関係は無視されているではないか。マルクス、エンゲルスには、ブルジョア階級とプロレタリア階級の闘争は、必らずプロレタリア階級の勝利をもっておわるという一〇〇%の自信があった。強大な民族、抑圧している民族が一方にあり、他方に弱小民族、抑圧されている民族が存在する関係では、抑圧されている側の勝利は確信できないし、それにプロレタリアートが政権をにぎれば、帝国主義戦争はひとりでになくなるという楽観からか、民族闘争のことは何とも言わないで、階級闘争ばかりを口にする。そうだとすると、階級闘争にばかり力を入れ、民族闘争を軽視したのは、まちがいだったということになるのではないか。民族問題の解決は、ヨーロッパ、特に東ヨーロッパでは絶望的と言えるほど困難に思えるので、マルクス、エンゲルスはこれをあとまわしにし、階級闘争に全力をあげたのかどうか。これはわたしも今日、自信をもって言いきれない。

二　関東大震災の思い出

一九二三年（大正一二年）は関東大震災の起った年である。三月に京大経済学部を卒業した三宅心平先輩は四月から東京の三菱銀行本店に勤務することになって、お別れの意味がこめられていたのか、それとも京都の旧制高校（三高）にわたしがやっと入学できたことへのお祝いのしるしだったのか、恩師河上肇の著書『近世経済思想史論』一冊をわたしにプレゼントしてくれた。

三宅心平は、わたしの母教会である京都市内の室町教会青年会のメンバーでもあって、わたしに、「文学書やキリスト教関係の書物ばかり読まないで、たまにはこういう本も読まれたらいいでしょう。マルクスの学説が、くわしく、わかりやすく紹介されています」ともつけ加えた。受験勉強のあいまに小説を読むとか、キリスト教に関係のある本を読むことはあっても、経済思想の本とは近づきがたいものを感じ、プレゼントされても『近世経済思想史論』をすぐには読まなかったが、二三年九月の初旬、三宅心平は東京で三菱銀行からの帰りみちで町内会の警防団につかまった。一人の少年が白刃の日本刀を振りまわしながら、「お前は朝鮮人か、日本人なら日本人であるという証拠に〝鳩ぽっぽ〟の歌をうたえ。ちゃんと歌ったらかんにんしてやる」と言った。

若い三菱銀行のエリート社員は、ちんぴらに脅されてくやしかったが、歌わなければ切り殺されそうなので、仕方なしに〝ぽっぽっぽ、鳩ぽっぽ〟を歌った。三宅先輩は、朝鮮人だと疑われて日本刀で切り殺されるのもつまらないと思って歌ったが、その晩は、くやしくてねられなかったそうである。

関東大震災のとき、わたしは東京市赤坂区の叔母の家に滞在していたので、京都へ帰ってから室町教会の青年会の諸君から以上の話をきいたのであるが、朝鮮人は悪いことをしなくても殺される。日本人なら助かる。日本人でも〝鳩ぽっぽ〟がまともに歌えなければ殺される。相手はちんぴらでも、まわりのおとなが、それはもちろん日本人であるが、なぜちんぴらのやることをとめなかったのか。

わたしが同志社中学の生徒であったころ、クラスに二名の朝鮮人と二名の台湾人がいて、日本人の生徒は、朝鮮人は反抗的だ、台湾人はおとなしい、という風に感じていた。なぜ反抗的であるかについては考えず、震災で社会秩序が乱れてくると、朝鮮人は日本人に反感をもっているから、何をするかわからん。やっつけろというようなことになったのだろうとわたしは思った。

朝鮮の首都京城の近くでは、朝鮮独立運動のさい中に、朝鮮人多数をキリスト教の会堂の中に閉じこめ、鍵をかけて出られないようにし、会堂に火をつけて焼き殺したという内地の新聞が報道しないニュースが、同志社中学生のあいだでは、ささやかれていた。ささやかれたからといって、民族の問題を日本人の中学生がまじめに考えたというわけでもなかったが、すくなくともわたしの心の奥に、日朝両民族の問題が民族の問題として残ったように思う。

わたしの泊めてもらっていた叔母の家は、長女は女学生、長男、次男は小学生、次女は幼稚園、叔父はとっくに病死していたので、旧制高校生であるお客さんのわたしが、いちばんたよりになる存在となった。そのわたしにとって、軍隊が出動して街かどに銃剣つきで立っていてくれるようになると、これで社会秩序が保たれる。これでホットできるという気持になった。大地震の直後は、小さな野っ原に多数の人が天幕を張ってねるとか、お米をどうして手に入れるとか、何となく不安だったが、兵隊が街かどに立っていてくれれば、泥棒も強盗も現われないだろうという安心感がもてた。

五年前、一九一八年の米騒動のときは、群衆があばれて社会秩序が乱れたが、群衆の暴動が、警察の力では抑え切れなくなると、軍隊が現われ、軍隊が現われると群衆はおとなしくなった。

日本の群衆は、警察官に向っては石を投げるが、軍隊に対しては石を投げない。兵士というのは貧乏な農村から徴発されているので、自分の意志で兵士になっているわけではない。月給をもらっているわけでもなく、彼等に石を投

げるのは可哀そうだと日本人の群衆はみんな思っているのだ、と年上の人がわたしに解説してくれた。わたしはキリスト教の環境の中に育ったので軍国主義、国粋主義には反感をもっていたが、わたしも兵士たちに石を投げる気にはなれなかったし、関東大震災のときは、兵隊をたのもしいとさえ思ったのである。

三　『宣言』をゼミのテキストに

わたしが『近世経済思想史論』を読んだのは、一九二六年の頃であったと思うが、その頃になると、社会問題研究会、社会科学研究会が旧制高校、大学の中でさかんになり、階級、階級性、階級意識、階級闘争という言葉が目や耳にどんどん入ってきた。

カール・マルクス、フリードリヒ・エンゲルス共同作製の『共産党宣言』の中の「すべての従来の歴史は階級闘争である」を河上肇は、『日本経済思想史論』の中で六回も七回も繰り返し引用していたので、わたしは強い印象を受けたし、同時に弱いながら反発を感じていた。

人類の歴史は民族と民族との争い、強い国が弱い国を侵略したり、宗派と宗派も血なまぐさいけんかをしたり、女性解放のたたかいがあったり、いろいろさまざまであるのに、すべてを階級闘争と決めてしまうのは、無茶苦茶だ、マルクスやエンゲルスはどうしてこんな荒っぽいことを言ったのだろうと思っていた。

河上肇は、自分の意見としては言わないで、マルクスはこのように考えている。マルクスの意見によればこうである、と受け売りばかりやっている。日本は後進国だし、ドイツは先進国だから、仕方がないかもしれないが、一九世紀の中ごろ、今から六十年も七十年も前に、日本の事情、アジアの事情を知らないマルクスが言ったからといって、

その理論を、そのまま日本に適応するということもないだろうとわたしは幼稚な頭で考えた。

階級という言葉にしても、われわれ日本人は陸軍大将と陸軍中将とは階級がちがうというような言いかたをしてきた。資本家階級と労働者階級とを全く相容れない階級と見なす考え方、そういう考え方をわれわれは学校でならわなかったし、しかしそれはそれで成るほどとも思うたが、すべての闘争が階級闘争だなどという説は、とうてい納得できなかった。

わたしの住んでいる京都のまちは、いたる所に中間層の人間がいて、菜っ葉服を着た労働者、いわゆる近代的プロレタリアートはどこにいるのか、見つけるのに苦労する。中間層を軽視して、革命を起し、労働者階級の力で資本家階級を打倒するといっても、ぼう大な人口をしめている中間層を軽視して、どうして革命などできるのかと、わたしは思った。革命運動家は、小ブルジョアを「プチブル」と称して軽蔑しているが、菜っ葉服の労働者は、はたしてみんな天晴れな闘士なのか。戦争中、日本の労働者はみんな軍需産業に従事していたではないか。反戦活動をすれば一家全員飢え死にするということになるのだから、非難はできない。朝鮮人労働者は、日本人の資本家に搾取されているのだから、階級闘争を大いにやるのはよろしいが、朝鮮民族全体としては朝鮮民族の日本帝国主義の支配からの解放が最大の闘争目標ではなかったのか。マルクス主義者は、民族解放闘争には力を入れるが、階級闘争には力を入れない人間に「民族主義者」というレッテルをはって軽蔑するが、あれはまちがいではないか。

そんなことを考えているうちに敗戦となり、一九四九年（昭和二四年）の秋から、わたしは同志社大学の社会学科でゼミの時間をもつことになったので、マルクス、エンゲルスの『共産党宣言』をわたしはテキストに選んだ。学生は新聞学（マス・コミュニケイション学）専攻で、『共産党宣言』をテキストに指定するのは不適当であることはよくわかっていたが、わたしは『宣言』にかんしてのさまざまな意見を若い世代の学生諸君から聞きたい、聞けるだろ

うと思ったのである。

ゼミの学生は全部で九名、全部男であったが、『共産党宣言』に積極的な関心を見せたものは一人もいなかった。だれも意見をきかしてくれなかった。

考えてみれば、これら九名は全部十五年戦争が始まった頃は、赤ん坊か、赤ん坊にもなっていない年がっこうであって、今までの歴史はすべて階級闘争の歴史であるとか、第一節「ブルジョアとプロレタリアー」とか、そんな言葉を、目で見ず、耳できかずに少年時代を過ごしたのであるから、関心がないのがあたり前だったと今日のわたしは思っている。

帝国主義戦争に命がけで反対した日本共産党に対する尊敬の念から、階級闘争という言葉の流行が一時さかんになった時期もあったが、階級闘争という言葉は結局は流行語でしかなかったのではないか。

一九三六年十一月のソビエット党大会で、スターリン書記長は「今や階級は消滅した」と見得を切り、万雷の拍手をあびた。しかしながら、階級が消滅したあと、党員が支配階級になってしまって、階級闘争という言葉は魅力を失なう結果になってしまった。

四　エンゲルスの奥さん

この機会に、『共産党宣言』の起草者マルクスとエンゲルスご両人の奥さん、特にエンゲルスの奥さんのことを思い出してみよう。

マルクス夫人イエニーが結婚する前から、トリーア市でいちばん美しい女性として、「舞踏会の女王」として知ら

れていたこと、マルクスがその美しさに惹きつけられて結婚を申しこんだこと、マルクスにろくすっぽ収入がないので奥さんはさんざん苦労したことと、三人の娘を生んだこと、その他いろいろとエピソードが伝えられており、マルクス夫人の写真もいくつか種類があって、マルクス夫人の存在は明らかであるが、エンゲルス夫人は一体どうなっているのか。

日本人として、いちばん簡単に入手できるのは大内兵衛著の『マルクス・エンゲルス小伝』（岩波新書）であるが、エンゲルス夫人が正式の奥さんであるのか、ないのかにかんしては、著者大内はさっぱり不熱心である。小伝の一二二ページのところで、マルクスは新妻と長女をつれてブリュッセルへあらわれたとき、エンゲルスはマンチェスターで知り合った内妻メアリ・バーンズを連れていた、と書いているだけで、メアリ・バーンズがいつ内妻から正妻に変わったのか、変わらなかったのか、いつ死んだのか、何にも書いていない。いくら小伝だといってもこれはひど過ぎるとわたしは思う。

フリードリヒ・エンゲルスは一八二〇年に生まれたのであるから、一九七〇年には、生誕一五〇年を記念して、ドイツ民主共和国社会主義統一党付属のマルクス＝レーニン主義研究所の所長代理ハインリヒ・ゲムコーの責任編集ということで、ディーツ書店から『フリードリヒ・エンゲルス―伝記―』が刊行された。日本語訳は一九七二年に大月書店から上梓され、訳者は土屋保男、松本洋子両氏、上下二冊になっている。上巻の年譜には、一八四三年に「アイルランドの女子労働者のメアリ・バーンズとの共同生活がはじまる」と記されており、正式の結婚式があげられなかったことが、まず明らかにされている。

メアリ・バーンズの名前は、年譜に三度あらわれるが、二度目は、一八五六年にエンゲルスがメアリ・バーンズとアイルランド旅行を共にしたことが記されており、三度目は、一八六三年一月六日、エンゲルス夫人がマンチェスタ

ーで没した。」それでおしまいである。

三度目は、エンゲルス夫人となっているので、エンゲルスとメアリ・バーンズは中年になってから正式の結婚式を行なったと、とる人も出てくるだろうが、わたしは承認できない。なぜかと言えば、エンゲルスは、彼女が思いがけなく心臓病か卒中かで急死し、その旨を親友マルクスに告げた手紙がマルクス・エンゲルス全集におさめられており、そこでエンゲルスは「あのかわいそうな娘は心底から僕を愛していたのだ」と書いている。正式の奥さんをまさか、「かわいそうな娘」とは言わない、と思われるからである。

フリードリヒ・エンゲルスとメアリ・バーンズは、マンチェスターで二〇年間同棲していたのに、なぜ正式に結婚しなかったのかという疑問が当然出てくるが、それに対しては、エンゲルスの家庭はプロテスタント教会の中の敬虔派であり、メアリ・バーンズはアイルランド人であるから当然カトリック教会に籍があったであろうし、そんな事情ではプロテスタントの牧師さんも、カトリックの神父さんも司式をしてくれない、教会堂を使用さしてくれないという結果になっただろう。

次に、エンゲルスの両親のアイルランド人に対する差別感というものが考えられる。一方は裕福なブルジョア、他方は気の強い、しかし無教養の女子労働者で、ゲムコーの『エンゲルス伝』によれば、アイルランド魂にみちあふれているというのであるから、エンゲルス家にはとても似つかわしくないお嫁さんということで、縁談はまとまらないという風に推測される。それでも当人どうしの愛情は深く堅いということで、同棲生活は二十年もつづいた。内妻が死んだとき、エンゲルスは四三歳、そのあとどうしたのか、メアリの妹レジーと同棲したのだから、いい話ではない。

マルクスはマルクスで、ロンドンで奥さんと仲よく暮らしながら、家政婦ヘレーネ・デームートに男の子を生ました。エンゲルスはエンゲルスで、まともな結婚生活をしていないとなると、世間からいろいろと嫌なことを言われそ

うで、マルクス・エンゲルスを尊敬してやまぬ人たちは「臭いものにふた」をしたい気持になったようである。しかしそれでは社会科学者らしくないということになってしまう。

わたしにとっていちばん気になるのは、アイルランドからブリテン島へ移住してきていた女性メアリ・バーンズと、ドイツからブリテン島へ渡ってきた労働者階級の生活状態を調べているフリードリヒ・エンゲルスとが、マンチェスターで知り合いになって同棲生活にはいったことに文句はないとして、エンゲルスの調査が本の形をとり、ドイツのライプチヒから『イギリスにおける労働者階級の状態』という題で出版されたのを読むと、アイルランド人は、不潔で、粗暴で、酒飲みで、豚と人間の中間みたいな生活をしていると書かれており、アイルランド人が読めば、本当のことが書かれていると思うにしても、不快な念をおぼえるのではないか。著者エンゲルスはドイツ人にちがいないが、アイルランド人は、ブリテン島で働いているアングロサクソン系の奴らと同じような目で自分たちを見、差別し、軽蔑している、そう思うのではないか。

わたしにとって不可解なのは、エンゲルスが同棲しているアイルランド女性は、労働者であって、アングロサクソン系の労働者を敵視し、けしからんと思っている人物であって、そのような女性と仲よくしながら、エンゲルスはどうしてあのような侮蔑的な叙述をしたのか、これがわたしのいちばん知りたいところである。

エンゲルスの『イギリスにおける労働者階級の状態』には、アイルランド出身の労働者は最低の賃金をもらって生きており、馬鈴薯に塩をつけて食べるのが、せいいっぱい、街をあるくときは、はだしであるいており、おカネがあまれば火酒を飲む。アイルランド人には教養がない、とも書かれている。エンゲルスがいくらアイルランド系労働者の生活程度の低さをドイツ語で書いても、アイルランド出身の労働者はドイツ語の本を買ってよむはずはなく、エンゲルスの本はドイツでドイツ語で出版されたのだから、アイルランドの労働者が買って読むはずはない、ということ

が考えられるが、同棲していたメアリ・バーンズは、エンゲルスの著書の中味について、はたして何にも知らなかったのだろうか。

青年時代のわたしは、日本人のプロテスタント教徒であったから、イギリスのウイリアム三世がプロテスタントの大軍をひきいて、カトリック派のアイルランドに攻めこみ、アイルランドの軍隊や住民を大虐殺したのを何とも思わなかったが、今はちがう。今はカトリックのアイルランドに同情的で、一六七二年、フランスのカトリック派が、一夜のうちに三〇〇〇人のプロテスタント教徒を虐殺した事件も忘れてはいない。あれは、マルクス、エンゲルスが何と言おうと宗派と宗派の争いであって、階級闘争ではなかった。

わたしは、この小さなエッセーの表題を「抑圧する者とされる者」とした。

マルクスやエンゲルスにとっては、抑圧するものは、自由民であり、古代ローマの世襲貴族であり、中世の領主であり、近世の同業組合の親方であり、近代のブルジョアであり、抑圧される者は、奴隷であり、古代ローマの平民であり、中世の農奴であり、近世の職人であり、近現代のプロレタリアートであるかもしれないが、日本帝国主義の植民地支配下におかれてしまった朝鮮民族も、アングロサクソン系労働者から差別されていたアイルランド民族も、エンゲルスが平気で軽蔑していた東ヨーロッパの弱小諸民族も、（一橋大学の教授だった良知力著『向う岸からの世界史』参照）、日本の女性も、みんな抑圧された人びとではなかったか。抑圧する者とされる者との関係を重視しながら、抑圧する強い民族と抑圧される弱い民族との関係を無視し、階級、階級と言い過ぎたのは、やはりまちがいだった、と現在のわたしは思っている。

（わだ　よういち・同志社大学名誉教授）